

2010年11月13日 講義2

講義タイトル：Wildlife and natural resource management in Namibia

講師：Dr. Chris BROWN

キーワード：乾燥地、野生動物、保全、管理、現金収入

要約

ナミビアでは、乾燥地にある牧地へ野生動物を戻すプロジェクトが行われている。対象地は400万エーカー（64万平方km）。ナミビアは国土全体が乾燥地である。北にKunene川、南にOrange川が流れる以外は年に2、3日間しか流れない季節河川である。降水量は北東部が一番多く、南西、海岸沿いに近づくにつれて減少していく。十分な降水量がないため土地は痩せており、農業をおこなうことがむずかしい。実際に集約農業は4万ha、最北部の農業可能地は550万haに対して北部の牛放牧地は3100万ha、南部の羊・山羊放牧地は2700万haもある。放牧地においても十分な草本がないため牛一頭の放牧に15haも必要である。

しかしこの乾燥した土地には野生動物が生息している。この野生動物を観光資源として利用することでより多くの現金収入をえることが可能である。過去40年間で家畜の頭数は減少し、野生動物の頭数は増えている。家畜には肉の出荷、自家消費、販売しか利用方法がないが、野生動物には肉や販売以外にスポーツハンティングや観光などの資源として利用する方法がある。このような資源利用はより現金収入を得られる。そのため土地利用者は、家畜を飼育することよりも、野生動物を保全管理することに力を入れている傾向があり、それによって野生動物数が増加していることが考えることができる。

降水量の多い湿潤地では農牧業の方が土地当りの収入は多いが、乾燥地では農牧業よりも野生動物からの収入が多くなる。よって乾燥地では湿潤地のような野生動物の保護区を作るのではなく全地域で野生動物を利用しながら管理する方が収入は多く、また保全も出来る。40年前には確かに密猟等の問題はあったが、現在は収入になると解ったため野生動物は守られるようになり、問題は起きていない。もちろん人間と野生動物の間に衝突はあるが、十分な数の野生動物が生息しているならば、現地住民の思うとおりに野生動物を扱っても問題はない。さらに地球温暖化で降水量が減少しても野生動物ならば対応できる。

また食料自給のために家畜を減らすべきではないという意見もあるが、食料自給（Food Self-suffusion）と食料保障（Food Secure）は異なる。より多くの現金収入の方が食料は保障される。よって私有地にある牛の柵を取り払い、ナミビア全土を野生動物の保全地に変え、さまざまな土地所有者と共同管理していきたい。

（報告者：佐野航平）